The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

蔵訳『荘厳経論安慧釈』における著者問題
——安慧作とすることへの若干の疑問——

上　野　康　弘

1．問題の所在　蔵訳のみに残る *Sūtrālaṃkāravṛttibhāṣya*（以下『安慧釈』と略）は，チベットの伝承では安慧（Sthiramati, ca. 510–570）の著作とされ，従来，国内外の研究者たちもその伝承に従いながら，各々の研究成果を公表してきた．『大乗荘厳経論』を研究対象とする研究者にとって『安慧釈』はその詳細な—くどいとも言われるが—注釈によって貴重な情報を提供しており，『荘厳経論』の偈や『世親釈』の読解に寄与するところが大きい．1970年代後半から，長尾雅人，早島理，小谷信千代らが『安慧釈』を対象としたテキスト研究を行うようになり，その成果は現在も着々と積み重ねられている[1]．ただし『安慧釈』のテキスト研究ではあっても，その研究が一章分のみに留まっている限り，『安慧釈』全体を連結し，総合的に捉えるという意識は極めて薄いと言わざるを得ない．つまり作者安慧という立場から『安慧釈』の解釈を見るという視点はあまり見当たらないのである．『安慧釈』のテキスト研究が細分化されつつある現在，それに依拠しながら全体を一度俯瞰してみる必要がある．筆者の目的はそこにある．本稿ではまず奥付の記述を確認し，『安慧釈』の翻訳過程とそれの翻訳時期を確認しておく．その上で『安慧釈』中に見出される“奇妙”とも言える論述と，その論述内容を考察し，それが安慧の解釈かどうかを判断したく思う．

2．奥付の記述　［試訳］[2] 大先生安慧によって造られた『大乗荘厳経論広注』[3] 了．マンユル（Mang yul，南西チベット）[4] で学者ムニチャンドラと翻訳師チェタシが二種の註釈（世親釈と無性釈）に基づいた．学者［ムニチャンドラ自身（?）］も智慧を尽くして（ci mkhyen du），二種［の注釈］を比較しながら新訳したが，新注釈の中で（は）明瞭ではない諸［議論がある．しかし，そうだとして］も，この（安慧注の）中で詳しく教示している［．それ］ゆえに，これ（安慧注）も価値あるものとして下さい．末尾は多少不完全であり，これ（安慧注）は散逸しているので，二種の注釈と比べつつ［ご参照］なさって下さい（SAVBh：D tsi 266a5–7；P tsi 308a5–8）．

奥付の文章は少なくとも筆者にとっては難解で，あくまで試訳の域を出ない．しかし少なくとも我々がこの記述から理解できることは，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

・『安慧釈』が二種の注釈，すなわち世親釈と無性釈に基づきながら翻訳されていること．

・『安慧釈』は完本ではなく，その一部，特に結部を欠いていること．

である．前者については『安慧釈』の翻訳完成が二種の注釈の翻訳以降であることを示唆する．実際『安慧釈』がデンカルマ，パンタンの両目録に収録されず，それ以降のプトゥン目録（1322年）にのみ確認されるということ（西岡　1981: 56）[5]，また翻訳師チェタシが12—13世紀頃の人物であるということ（TBRC, Resource ID P1212），この二点からも『安慧釈』が比較的後代に翻訳されたのは間違いない．後者については実際『安慧釈』の最終章が途中で終わっている．すなわち『荘厳経論』の第20章・第31偈の注釈中に突然終わる（MSABh: 181.18–19）．なお不完全な原本のままチベットに伝わったのか，あるいはチベットに将来された後に一部が紛失してしまったのかはこの記述からは分からない．以下に『安慧釈』中の論述を確認していくが，ここで指摘した翻訳時期の遅さは念頭に置いて頂きたい．

3．安慧作を疑う論述とその内容解説

3．1．四種道理の注釈内容　四種道理とは「物事の間の道理，法則，関係」（吉水1996: 140）を意味するという．しかしこのうちupapattisādhanayuktiは，吉水氏が言うように「物事の間の道理」というよりも，物事を論拠（upapatti），すなわち直接知覚，推理，信頼できる伝承によって証明する（sādhana）論証方法（yukti）という側面を持つ．『安慧釈』においても例外ではない．吉水氏は『安慧釈』の「功徳品」（Guṇādhikāra）に注意を向けているようだが（吉水　1996: 143, n.48），しかし実際に『安慧釈』にはもう一例，upapattisādhanay°の例が第8章「成熟品」（Paripākādhikāra）に見出される：

> ［試訳］そのうち，四種道理は観待道理，作用道理，証成道理，法性道理である．［…］証成道理は三つである．［1］kāryahetu，［2］svabhāvahetu，［3］anupalabdhihetuである．そのうちkāryahetuは「およそ煙のある所には火がある」の如し．Svabhāvahetuは木と呼ばれるものはシンシャパー樹，デーヴァダール樹など全てを遍充する．よって「これは木である．何故か．シンシャパー樹であるから」の如し．Anupalabdhihetuは「この場所に認識の条件を備えているにも関わらず，壺が見られなければ，壺は無い」の如し（SAVBh: D mi 95a5–95b2; P mi 108a6–108b3）．

「成熟品」はupapattisādhanay°を三つの論証因と解釈し，その論証因の内容を示す論証式を列挙する．この論証因，および論証式の内容は，明らかに法称（Dharmakīrti, ca. 600）を嚆矢とする論理学に影響を受けている．筆者の知る限りでは安慧の在世時において未だこの論証因は用いられていない．先述した吉水氏などの先学の

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

理解に従えば，一般的に upapatti は三量を意味すると思われるが，ここでは hetu と理解されている．吉水氏が注記するように，確かに安慧は他の著作で upapatti を論証因と結びつける傾向はある．彼の著作『中辺分別論複注』では upapatti を trirūpaliṅga（三種の条件を備えた論証因）とする（MAVṬ: 128.25–26）．これは陳那（Dignāga, ca. 480–540）によって定式化されたものを借用していると思われる．したがって「成熟品」の解釈が安慧の他の著作における理解と全く異なるわけではなく，同じ方向性で解釈されていることは言える．しかし法称を嚆矢とする論証因を用いるという点では，これを安慧の解釈，発言とは見なせない．一方，吉水氏が言及する「功徳品」では upapattisādhanay°を注釈する際に三種の論証因には触れず，二量（三量ではない）によって解釈する（SAVBh: D tsi 202a3–203a2; P tsi 235a8–236a6）．このような解釈の不統一は，両者を比較する限り，世親釈の存在に関わっている．すなわち安慧は「成熟品」では MSA 偈の dharmatāyukti，「功徳品」でも MSA 偈の caturdhā yukti に対して注釈しているが，「功徳品」では世親釈に依り（→二量），「成熟品」では世親釈は存在しないため独自の注釈を施す．世親釈があればそれに依存するが，それがなければ自由な解釈を施す（→三種の hetu）という印象を抱かせる．また訳語の相違に関しては，「成熟品」では upapatti を gtan tshigs とし，「功徳品」では 'thad pa と翻訳している．「成熟品」については確かに gtan tshigs の方が理解はし易い．

3．2．離一多性を論証因とする無自性論証の推論式　「覚分品」（Bodhipakṣādhikāra）第 82 偈からは刹那滅論が展開され，『安慧釈』は詳細な注釈を行っている．ただし議論の冒頭で次のような議論をする（早島理氏の和訳から引用）：

> ［早島訳］「不合理であるから，原因から生じるから（ayogād dhetutotpatter［MSA XVIII k° 82a］」云々と云ううち，存在しているものは正しい認識手段（pramāṇa）によって立証されるが，それは三項によって立証されるべきである．すなわち命題，理由（論証因のこと—注記上野），比喩である．たとえば，命題「存在しているものはすべて無自性である」，理由「一・多の自性を離れているから」，比喩「映像の如し」である（早島 1994: 30; SAVBh: D tsi 133b7–134a1; P tsi 158b3–5 からの和訳）．

「覚分品」では刹那滅を証明するために 15 の理由を示す．『安慧釈』ではその理由を原因（rgyu），論証因（gtan tshigs）と理解している．諸存在は pramāṇa，この文脈では推理によって証明されるとし，そこで推論式の例が挙げられる．しかしこの推論式は離一多性を論証因とする無自性論証である．先学の研究によれば，この論証因を用いた推論式はシャーンタラクシタ（Śāntarakṣita, ca. 725–788），カマ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ラシーラ（Kamalaśīla, ca. 740–795）の活躍時期を嚆矢とする（江島　1982: 217）[6]．ただし，この推論式ではシャーンタラクシタ達が「“勝義において”無自性である」，つまり“勝義において”という限定句を付すが，『安慧釈』ではその限定句が無い[7]．『安慧釈』の推論式は前後の刹那滅論と関係しているわけではなく，単に推論式の一例として列挙されているにすぎない．この推論式が安慧在世時より時代を隔てた時代に定式化されたことを考慮するならば，これを安慧自身の理解，または発言に帰することはできない．

3．3．『安慧釈』における rgya gar skad du　『安慧釈』の各章では，ある術語を説明する際に，その語の蔵訳をまずは表記した後，それを rgya gar skad du，すなわち「インド語で」音写する場合がある[8]．管見の限り，筆者はこのような翻訳の仕方を知らない．音写の例を始め，上記の議論の挿入は，『安慧釈』の全体に何らかの問題が横たわっているように思えてならない．もともと梵語写本にそのような議論が存在したというよりも，翻訳時における何者かによる—翻訳者か（?）—挿入を示唆するように思われる．

4．おわりに　以上の諸例は6世紀頃に在世した安慧自身の発言ではない．よって筆者は『安慧釈』の論述内容を無批判に安慧に帰することに疑問を覚える．ただし筆者は『安慧釈』が安慧の著作に非ずと言っているわけではない．安慧作とするチベットの伝承にも何らかの根拠が存すると思われる．今後の『安慧釈』の研究においては，どの解釈までが安慧自身のオリジナルであり，どの解釈がそうではないのか，という視野に基づく研究方法が求められるのではないか[9]．

1）先行研究は省略する．なお『安慧釈』の全体像把握において引用文献調査は欠かせない．その意味で以下の研究は大いに注目されるべきである：岡田憲尚・岸清香「Mahāyānasūtrālaṃkāra 18 章諸註釈書の引用文献（Ⅰ）–（Ⅱ）」『宗教学・比較思想学論集』8–9 号，87–134; 61–103，2007–2008.

2）奥付の和訳については，高野山大学助教・加納和雄氏，筑波大学教授・吉水千鶴子氏から貴重なご助言を頂いた．もとより訳責は筆者にある．

3）首題では，蔵語で *mDo sde rgyan gyi 'grel bshad* とされ，印度語で *Sūtrālaṃkāravṛttibhāṣya* とされる．奥付における rgya cher bshad pa は，無性（*Asvabhāva, ca. 500）の『荘厳経論』に対する注釈，すなわち *mDo sde rgyan gyi rgya cher bshad pa*（首題，奥付両者ともに同じ）というテキスト名と一致する．そこでの rgya cher bshad pa は印度語で ṭīkā とされている．

4）Mang yul という語がインド・ネパールの国境付近の地域を指すことは京都大学人文科学研究所教授・船山徹氏のご教示による．

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

5）チョムデンリクレル（1227–1305）による大蔵経目録では，すでに『安慧釈』の存在は知られている（Schaeffer and Kuijp 2009: 170）．加納氏のご教示による．

6）また同時代のシュリーグプタもこの推論式を用いるため，彼ら二人の論師との先後関係には注意すべきである．See 小林　1992: (37)–(42)．

7）大阪学院大学非常勤講師・赤羽律氏のご指摘による．それ以外にも後期中観派における離一多性論証については，赤羽氏より多くを教わった．記して謝意を表したい．

8）縁起品（*Prastāvanā）⇒ SAVBh: D mi 6a4–5; P mi 6b3，種姓品（Gotrādhikāra）⇒ *ibid.*: D tsi 12a1–12b1; P tsi 14a1–14b2，覚分品（Bodhipakṣādhikāra）⇒ *ibid.*: D tsi 100b5, P tsi 119a8，行住品（Caryāpratiṣṭhādhikāra）⇒ *ibid.*: D tsi 256a4–5; P tsi 296b5–6.

9）筑波大学教授・佐久間秀範氏の近年の論考では「安慧と玄奘の思想的近似性」が主張されている（佐久間　2008）．しかし現時点では SAVBh への依存は避けるべきと思われるため判断は保留とする．今は佐久間氏を中心とする「法相宗所伝のインド瑜伽行派諸論師の系譜の再考（科研）」に基づいた SAVBh の総合的な評価が待たれる．

〈略号と参照文献〉

MAVṬ: Madhyāntavibhāgaṭīkā（Sthiramati）: Ed. S. Yamaguchi. **MSA**: Mahāyānasūtrālaṃkāra, See **MSABh**. **MSABh**: Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya（Vasubandhu）: Ed. S. Lévi. **SAVBh**: Mahāyānasūtrālaṃkāravṛttibhāṣya（Sthiramati）: D. no.4034; P. vol.108–109. **江島　1980**: 江島惠教『中観思想の展開— Bhāvaviveka 研究—』，東京．**早島　1994**: 早島理「諸行刹那滅 "kṣaṇikaṃ sarvasaṃskṛtam" — *Mahāyānasūtrālaṃkāra* 第 XVIII 章 82・83 偈の解読研究」『長崎大学教育学部社会科学論叢』47，27–42．**小林　1992**: 小林守「シュリーグプタ作『真実への悟入』—和訳研究（上）—」『論集』19，(37)–(56)．**西岡　1981**: 西岡祖秀「『プトゥン仏教史』目録部索引 II」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』5，43–94. **佐久間　2008**: 佐久間秀範「法相宗所伝の諸論師系譜の再考」『多田孝正博士古稀記念論集　仏教と文化』東京，171–194．**Schaeffer and Kuijp 2009**: *An Early Tibetan Survey of Buddhist Literature*, London. **吉水　1996**: 吉水千鶴子「*Saṃdhinirmocanasūtra* X における四種の yukti について」『成田山仏教研究所紀要』19，123–168.

当論稿は平成 20（2008）年 7 月に高野山大学で開催された密教研究会での発表を基礎としている．その後，高野山大学教授・室寺義仁氏，船山徹氏，東北大学文学部准教授・吉水清孝氏の薦めにより当学会で発表する機会を得ることができた．常に最新の情報を提供して下さる加納氏を始め諸氏には深く感謝したい．

〈キーワード〉　スティラマティ，『大乗荘厳経論』，ディグナーガ，ダルマキールティ，upapattisādhanayukti，Mang yul

（高野山大学密教文化研究所受託研究員）

NII-Electronic Library Service